令和 6 年1月 31 日
＜JH8CBH＞

和文モールス教材の作成について

1　背景と経緯

かつて、函館は、青函連絡船の発着する街、北洋船団の集結地、また、海上保安庁、水産高校の練習船など、船に関わる産業が栄え、それに関わり、多くの通信士が函館に集まっていました。その通信士の中には、アマチュア無線を楽しむ方も多く、アマチュア無線を楽しむ中で、いわゆるプロの方から、無線通信技術を教えていただくことも多々ありました。

当時は、子どもだった私も、その中の一人でした。無線通信用語やQ符号、備え付けの書類、沈黙時間、今まで知らなかったことをたくさん学びました。船の通信室や無線局もドキドキしながら、見学させてもらったことも貴重な思い出です。

数多くのことを学んだ中で、私は、モールス通信にすっかり魅了されてしまいました。通信士の打つ符号は、機械で正確に打つ符号に比べても、リズミカルで心地よく、聞きやすく、そして、心地よいものでした。さらに、私は、諸先輩に、取りやすい符号を打つこと、相手に合わせること、スピードより正確さを重んずること、法令に合った交信をすることも、学び、それが、今の私の血となり、肉となっております。

時は流れて、技術の進歩に伴い、モールス通信は、アマチュア無線以外では、ごく一部の通信しかに使われないようになりました。函館においても、青函連絡船、漁業無線局の廃止、北洋船団の集結がなくなるなど、通信士の街としての様相がしだいに薄くなってきました。アマチュア無線においても、その影響が大なり小なりと表出し、アマチュア無線技士の試験から電気通信術の実技試験がなくなったことも拍車をかけ、CW人口が減ってきました。

JARL渡島桧山支部は、モールスの文化を大切にしたということで、モールス講習会を続けて、現在に至っております。

一方、モールスの楽しみの中の一つである和文の文化にも触れていきたと思います。モールスが全盛だったころ、函館には、「函館モールス同好会」があり、和文による毎週のロールコールをはじめ、和文交信に関わる研修会、施設見学などを行っておりました。「全国和文電信の集い」も函館で開催したことがありました。その会も、会員の年齢の増加、また、会員のサイレントキーなどもあり、今は解散されております。しかし、その流れを汲み、毎週月曜日の午後 8 時には、和文によるロールコールは、継続中となっております。

私自身が和文を覚えたのは、欧文を覚えてから、10 年以上経過してからと振り返ります。函館モールス同好会に入って、仲間に鍛えられたのもそうですが、和文ができない一アマでありたくなかった負けず嫌いさもありました。

1996 年に一アマの和文の受信がなくなり、2005 年には、一級から三級すべての資格で、電気通信術がなくなり、モールスの理解が法規で問われる形に変更になりました。和文がネックになり一アマ受験を躊躇していた方が、資格を取り、一アマは一気に増えました。そのことはまた、和文のできない一アマ、さらには、事実上モールスのできない、三アマ、二アマ、一アマを輩出することにもなりました。

これら制度の改革は、時代の流れに沿ったものであり、否定することはしません。しかし、苦労して、モールスをマスターにした者にとっては、ちょっと心の中では割り切れないものが確かにありました。

それからは、単に資格取得のためではなく、自ら、モールス通信を習得したいという意思のある方が、欧文であれ、和文であれこの世界に飛び込んでくることになったわけです。

JARL渡島桧山支部は、電気通信術が廃止になる前から、私が中心となり、毎年のように欧文の講習会（2mFMを使い、毎日 2 か月間ほど実施）を開催してきました。特に 1985 年から 1990 年までの5年間は経過措置として、四アマ（当時は電話アマ）の資格を持っていれば、電気通信術に合格さえすれば、工学、法規の試験を受けずとも三アマ（当時は電信級）になれるというおいしい時期もあり、多数のローカル局が支部の講習会を受け、合

格の切符を手にしました。モールスの実技試験がなくなってからも、断続的に支部の行事としてこの講習会は続いています。

令和４年、令和５年には、コロナが世界中を襲い、アマチュア無線の事業も大幅に縮小せざるを得ない時期となりました。そこに脚光を浴びたのが、テレビ電話システムです。「リモートワーク」「リモート会議」が言葉としてすっかりと定着し、自宅に居ながらにして、仕事をしたり、会議に参加したりするなどが、当たり前になりました。これにヒントを受けて、ZOOMを使って、支部会員は、もとより、全国のモールスを始めたい人に声をかけ、講習会を実施しました。2 年間で 30 名余、さらにその模様を録音した教材によって、多くの方がモールスの世界へ入るきっかけとなりました。

平成5年度においても、支部の協力により、現在、2mFMを使ったモールス講習会が実施されております。

2　和文教材への思い

さて、ここからは、支部の事業とは、離れて個人研究ということで、お話をしたいと思います。

私が和文を覚えたのは、通信士たちの世界で鍛えられたのもそうですが、「和文のできない一アマ」とみられるのがいやだった負けず嫌いさも大きいものでした。今でもそうですが、欧文であれば、どれだけ高速で打ってきても、全く苦にならず普通に交信できます。こちらが送信するスピードには限度がありますが。一方和文は、ある程度の速度は、受信することができますが、「いくら速くても」とは言うことができない程度のレベルであります。ですから、私のようなものが「和文とは」「和文の教材を作りました」などというのは、烏滸（おこ）がましいのかもしれません。

しかし、アマチュア無線に対するエネルギーもまだまだありますし、技術的な要素もカバーできそうだという思いで、今回100回の講習で、和文が何とかできるようになるだろうという教材を作るに至ったわけです。

私は、和文は、覚えたくなった時が、学び始める時だと思っています。今、モールスを楽しむほぼすべての方は、欧文から入っていると思います。欧文でモールス通信を楽しみ、通信に自信が持てるようになると、少しずつ、「和文」が頭の中をよぎるようになってきます。何か言いたいことがあっても、「VY FB」とか、とってもとっても感謝の意味を込めたいときにも「TU」のＵの長点を何倍にも伸ばすぐらいの表現で、どうしてももどかしさを感じます。そう感じた時が、和文の門をたたく時と思っています。ですから、欧文を覚えたての人が、「それじゃあ、和文も一緒にマスターしてしまおう。」という方には、お勧めいたしません。どっちもあやふやになってしまうからです。

和文、欧文がある程度できるようになると、頭の中で、きちんとどちらかにスイッチが入ります。ツートトトと聞こえたら、「B」かな「ハ」かな。というようなこと

はありありません。欧文がしっかり身についていない方が和文もさらに勉強しようとすると、頭の中のスイッチがあっちこっち切り替わってしまい、上達を阻害すると考えております。

和文には、文字のごとく、日本語そのもので、思ったことを表現できます。感謝の気持ち、欧文より細かな情報を伝えることができます。

そして、もう一つの和文の大きな魅力について、お話しましょう。それは美しい日本語には、感動するということです。話し言葉をそのまま打つこともできますが、言葉を圧縮しつつも、日本語の繊細さが伝わるような文が送られてきたとき、感動があります。私もまだまだ勉強中ですが、このような言葉でやりとりできるようになりたいなあと思います。

他にもあります。日本語ですから、全部とれなくても、だいたい意味は取れます。相手の打ってきたことにさらりと触れるだけでもコミュニケーションが楽しめます。また、日本語なので、「ありがとうございます。」「よろしくお願いします。」などのよく使う言葉は、単語として聞こえるようになってきます。こうなってくるとしめたものです。

また、ストレートキーや、バグキーなど、エレキ―とは違ったリズミカルな符号もよく聞かれます。聞いていてうっとりするような符号にも出合います。ただ、個性を強く出すのがいいことであるということではありません。相手が聞き取りづらいような符号も稀に聞かれます。時折、自分の符号を録音して、自分で聞いてみるのもいいことかと思います。

和文人口は、現実的に考えて少しずつ減ってきていることは間違いないと思います。モールスが通信手段として使われなくなってきている今、和文においては、輪をかけて先細りすることが予想されます。おそらく、今後もアマチュア無線だけに残されるアマチュア無線、特に和文の文化は、決して消してはいけない文化だと私は思います。

和文人口の減少に抗い、少しでも和文の楽しさ、和文の文化を守る教材が出ますことを期待し、この教材を作ってみました。興味のある方は少しずつ進めていただければと思います。

3　教材の活用

教材は 100 回分あります。全く和文の符号がわからない方も学ぶことができるよう、スモールステップで進めております。次のような原則と約束で進めていただければと思います。

①任意ですが、これから始めようとする方は、メールなどで連絡いただければ幸いです。そして時々、進捗状況を知らせていただければ幸いです。連絡いただいた方が、「もうやーめた。」って言わずに続けられる可能性が高いですし、私も函館からメールなどを通して応援することができます。

②初めて作った教材です。間違いがあったら教えてください。修正いたします。

③新しいノートと、鉛筆またはボールペン、そして、赤ペンを用意して下さい。新しいノートは自分の歩んだ軌跡になります。100回を修了した時には、ノートはきっと皆さまのかけがえのない財産になるはずです。練習は必ずそのノートに書いてください。チラシの裏などはダメです。黒ペンでとって、間違えたところは赤でチェックしてください。そうして、その日の練習の下には、その日の感想や自分の課題を書いてください。振り返るということが学習ではとても大切です。

④学習には個人差があります。これは、何十回となくモールスを指導してきても、どうしても解決が難しい課題です。覚えが遅いかなという方は、「遅い」のであって、「覚えられない」のではありません。インターネット上で何回も聞くことができるわけなので、たいへんでしょうが、繰り返し聞いて下さい。

⑤一日一講座で、100 回でゴールです。しかし、それぞれのペースで進めてかまいません。1 日2駒進めてもかまいませんし、状況によっては、2 日に1駒という場合もあるかもしれません。できれば飛ばさずに 100 回分をきいていただければうれしいです。

⑥スモールステップ（できるだけ緩やかな階段）にしておりますが、段差がきついようなところがありましたら、教えてください。補修教材なども入れて、段差を滑らかにしていきます。

⑦100 回目は、私との和文による交信が課題です。と言っても初めての和文の交信はドキドキでしょうから、カンペがあります。クリックするといつもの音源ではなく、交信例の PDF ファイルがでます。全くその通りに打ちますので、挑戦する方は、安心して連絡ください。とは言っても相当のドキドキ感はあると思います。一局でも交信すると、世界が変わります。その世界をご自分の頭で感じていただきたいです。

⑧連絡いただいている方で、100 回の講習を修了された方には、手前味噌ではありますが、私の方で、修了証を送らせていただきます。受け取っていただければ幸いです。

⑨述べてきましたが、あくまでも和文の好きなアマチュア無線家がボランティアで作ったものです。間違いなどがありましたら、お許しください。修正いたします。なお、気に入っていただければ、ローカル局やクラブの仲間などにも知らせていただければ幸いです。

本教材を作るにあたって、協力いただきました函館の和文仲間の皆様、ZOOM 講習会の修了生で和文にデビューされました方々、その他、本教材の作成に協力いただきました皆さまに、感謝申し上げます。

令和6年1月31日執筆

佐々木　朗　JH8CBH

和文モールス教材（現在最終調整中です）
https://edu-hakodate.jp/sasaki/jh8cbh/wabun/